

## 9. IAMAP 関連の他の Association Symposium

### HS 1: 季節的積雪の及ぼす広域的影響

森永 由紀 (筑波大・地球)

IAHS の6つのシンポジウムの中で気候との関連の深いものは2つあった。1つは標記の HS 1, 他の1つは HS 3「気候変化の水文・水資源への影響」である。シンポジウムは積雪と気候・積雪と水文・積雪とリモートセンシングという3つのテーマについて3日間行われた。いずれも対象は large scale である。

積雪の気候に対する役割としては、大循環と積雪、気候変化と積雪の関係等が議論された。北米大陸では地上のデータが積雪、気象要素共によく揃っているのが実感される。積雪と気温、トルネードやサイクロンの経路等の関係が吟味され、積雪の情報が予報に大きく貢献している。一方ユーラシアの積雪に関する研究は様々な気候の指標と各種相関を求めた統計的な解析にとどまるものが多く、その物理的過程を明らかにするに至っていない。しかしユーラシアの地上のデータに関しては各国の研究者は非常に高い関心を示しており、ソ連や中国に対してデータの公開を求める意見も聞かれた。

積雪の水文学的効果に関しては、融雪流出を把握する目的で積雪面積から積雪水量を見積るものが主であった。北米大陸については積雪水量と並んで土壌水分量も Snow Survey Program の一貫として扱われている。

積雪のリモートセンシングでは従来からの積雪面積のみならず積雪深や積雪水量を求める試みが盛んになされていた。

私自身が興味をもつ大気雪氷相互作用の解明には気候学者と水文学者の“相互作用”が不可欠であるので本シンポジウムに対する期待は大きかった。実際非常に面白かったが、両者の“相互作用”に関しては若干物足りなかった。まずは互いにどのような情報が必要なのかという意志の疎通が第一であるように思われた。

この会議に出席するにあたり、気象学会国際学术交流

基金から援助をいただきました。どうもありがとうございました。

### OPS 2: 大規模海洋循環の研究

平 啓介 (東大・海洋研)

国際海洋物理学協会 (IAPSO, International Association for the Physical Sciences of the Ocean) のシンポジウムであり次の4つのセッションで構成されていた。

- A) Pacific Ocean, Convenor L. Mysak, 28編
- B) Atlantic Ocean, Convenor J. Meincke, 27編, ポスター9編
- C) High Latitude Oceans (Arctic, Southern), Convenor A. Gordon, 18編, ポスター8編
- D) Global Ocean Circulation-WOCE, Convenor G.T. Needler, 19編

海洋の大規模運動はゆるやかなものであるが、時間スケール100日、空間スケール100km程度の活発な中規模運動にマスクされているため、大規模運動を記述するための全球的な同時観測はこれまで不可能であると考えられていた。ところが衛星観測により、海上風、海面温度、表層海流等が所要の時空間分解能で計測でき、その実現がはかられる状況になった。これらの計測データを入力して数値シミュレーションにより、海洋内部の現象を理解することが共通の目標となり、モデルを判定するための海洋観測資料を収集することが当面の課題になった。上の4つのシンポジウムでは、太平洋、大西洋、極海洋についての最近の研究成果の発表と1990年代に実施が予定されている世界海洋循環実験計画 (WOCE) の紹介が行われた。

IAPSO 加盟各国は IUGG 総会までの4年間の国内活動報告書を作成して配布している。わが国の報告書は学術会議海洋物理学研連 (永田豊委員長) で作成して配布した。各国の報告書 (IAPSO 以外の分も含む) は AGU からマイクロフィッシュとして頒布されることになっている。

## 講演企画委員会からのお知らせ

今度の春季大会においては、会場の都合により、講演開始時刻が通常 (9時) よりも10~30分遅くなります。

このため、第1日目の講演終了時刻がやや遅くなると予想されますので、あらかじめご承知おき下さい。